TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

明治・大正・昭和戦前期の調査研究に現れた海女——なぜ、女性の素潜りアマだけが注目されるようになったのか？

メタデータ	言語: ja 出版者: 東京海洋大学 公開日: 2024-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小暮, 修三 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2000056

Journal of the Tokyo University of Marine Science and Technology, Vol. 20, pp. 1-13, 2024

[論文]

明治・大正・昭和戦前期の調査研究に現れた海女——なぜ、女性の素潜りアマだけが注目されるようになったのか？

小暮修三

（Accepted December 12, 2023）

AMA Divers Who Appeared in Research Studies from the Meiji to Pre-War Showa Periods: Why Had Only Female Divers Gotten Attention?

Shuzo KOGURE *

Abstract: Why had only AMA divers gotten attention among free-diving fishers as the subject of academic research studies? In order to clarify this question, this paper genealogically traces the appearance of AMA divers in government and academic research studies from the Meiji to pre-war Showa periods. During the Meiji period, free-diving fishers began to attract attention as a result of fisheries surveys conducted by the Meiji government and local administrations out of a search for modern fishing techniques, and such free-diving fishers were not differentiated by gender. In the Taisho period, however, AMA divers as female workers attracted attention under the circumstance that women's labor was not inclusive of the modern labor market. Then, in the pre-war Showa period, AMA divers were the primary focus of attention through the disciplines of labor science and medicine/physiology, as a contrast regarding the physical effects of modern female workers. At the same time, attention to AMA divers was also encompassed by nationalism, and it appeared in the field of folklore studies, a discipline born out of a romanticized fascination with a vanishing traditional culture.

Key words: AMA (Woman) Divers, female workers, modern labor market, labor science, folklore studies

はじめに

女性の素潜り漁業者（海女）は、現在、その伝統的な漁法や持続可能な漁法という観点から注目を浴び、各種メディアにも多く取り上げられている。しかしながら、同じ素潜り漁業者（アマ）でも、男性の素潜り漁業者（海士）は、海女に比べてメディアへの露出度が必ずしも多くはない。むしろ、ほぼ取り上げられていない状況である。また、学術的にも、海女については各種学問分野での調査研究対象とされてきたが、海士への学術的言及は限定的なものとなっている。それでは、なぜ、海女だけが注目を浴び続けてきたのだろうか。

これまで、近代メディアにおける海女の描かれ方については、昭和期に至るまでの絵葉書や映画、博覧会の海女館、写真雑誌等々、時代別・媒体別に考察されてきた（小暮、2014、2015a、2015b、2016、2018、2022）。そして、海女に対する特定の関心は、近代メディアのみならず、学術的な調査研究の中にも現れてきた。しかしながら、管見の限り、そのような学術的「眼差し」に対する言説分析はなされていない。

それでは、なぜ、学術的にも海女だけが注目を浴び続けてきたのか。そして、学術的な調査研究対象として、海女はどのように描かれてきたのか。

本稿では、これらの疑問を明らかにするため、明治期の政府・地方行政資料から、大正・昭和戦前期の学術的な調査研究に至るまで、そこに現れた海女の姿を系譜的に追っていくこととする。

第一章　明治期のアマ——政府・地方行政資料に描かれたアマ

そもそも明治期の漁業は、日本沿岸における旧来的な非効率的漁業の衰退と、沖合における近代的な効率的漁業との狭間で、漁業技術の模索を伴った停滞状況にあったという。すなわち、漁業史家の二野瓶徳夫（1999）によれば、

* Department of Marine Policy and Culture, Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 4-5-7 Konan, Minato, Tokyo 108-8477, Japan（東京海洋大学 学術研究院 海洋政策文化学部門）

「非能率な漁業技術による生産は衰退の方向をとり、それを克服して漁場領域の拡大と能率化に向かっていた漁業技術による生産は発展しつつ……この二つが交錯しつつ漁業生産の停滞は明治末期まで続く」（58 頁）ことになったのである。

このような状況において、明治政府は、明治 12（1879）年から国内の漁業慣行の調査を開始し、同 14（1881）年には農商務省を設置、その農務局水産課が研究・普及・指導を基本姿勢として漁業振興を担っていくことになる。そして、その漁業慣行調査の成果は、漁業振興策の一環として内国博覧会に出展された。

さらには、明治 16（1883）年、同水産課の「最大の事業」として、漁業振興策に特化した水産博覧会も開催される。その「博覧会の目的は、在来の優良技術の開発・普及、すなわち漁業技術発達の地域差の実態を把適し、先進地域の優良技術を広く掘り起こし、それを他地域に普及させることにあった」（同上、101 頁）という。

このような各種博覧会への出展を契機として、各地方行政によって漁業誌編纂事業が行われ、そのような行政による「漁業誌」や「図説・図解」の編纂から各種博覧会への出展という流れは、明治 20 年代の第 3 回内国勧業博覧会や第 2 回水産博覧会にまで引き継がれることになるのである（井上、1995、112 頁）。

そこから本章では、この明治政府による漁業慣行調査の成果として編纂された「水産誌」、並びに、それに先行する形で地方行政によって編纂されて各種博覧会に出展されたもののうち、三重県、福岡県、熊本県、千葉県、宮城県、長崎県、計 6 県の「漁業誌」や「図説・図解」、これら政府・地方行政資料に掲載された「アマ」の記述について概観してみたい。

1. 明治政府によるアマの記述——農商務省水産局「日本水産誌」

明治 19（1886）年、農商務省の水産局設置に伴って同局が「日本水産誌」の編纂を企画し、調査・執筆・編纂を行った。この農商務省水産局編纂の「日本水産誌」とは、『日本水産捕採誌』（1912）、『日本水産製品誌』（1912）、そして『日本有用水産誌』（未刊行）3 冊の総称であり、明治 28（1895）年に、その工程のすべてが完了したという（藤塚、1995）。

しかし、『日本水産捕採誌』の序文によれば、同局の経済的事情によって原稿完成時には公刊できず、明治 40 年代になって、水産書院の刊行物『水産文庫』に順次分載することになった。なお、『日本有用水産誌』は同社から刊行されることなく未刊行のままである。

この「日本水産誌」のうちの『日本水産捕採誌』は、当時存在していた全国の漁具漁法について、日本各地の現物の調査や、古書から当時最新の書物に至る文献などをもとにまとめられたものである。同誌は、全 8 巻で「第一編 網罟」「第二編 釣漁業」「第三編 特殊漁業」の 3 編によって構成され、特に第三編の第六「鮑捕磯鑿」には、鮑捕りのための漁具漁法についての記載があり、志摩、筑前、安房、肥後、陸前の 5 地域におけるアマについて触れられている。また、同誌において、素潜り漁業者は『裸蜑（ハダカアマ）』又は単に『アマ』」（第 7 巻、16 頁）と記載され、古来から「アマ」とは男女の区別のない「漁人」を称することも指摘されている。

志摩地方（国崎、石鏡、相差、濱島諸村）と筑前地方では、アマ漁が「婦人の業」、つまり女性の仕事であることが特徴とされ、他方、安房国（外海及び上總国夷隅郡）では、「往時は婦人の業なりしが今は概ね男子にして女子は稀」（同上、22 頁）であり、肥後国（天草郡二江村）でも、アマは皆男性であり、魚も捕っていることが特徴とされている。また、陸前国では、アマ漁を行う者の性別や特徴については記されていない。

このように、明治政府における「アマ」とは裸で素潜り漁を行う者全般を指し、男女の区別は地域差として記述されていたことがわかる。つまり、明治政府は、海女のみに対する特別な関心を向けてはいない。

なお、明治政府による初の漁業センサスともいえる全国的な水産業の基本的構造調査は、明治 25（1892）年に編纂が始められ、その結果は『水産事項特別調査』（1894）にまとめられているが、数量データを主とする同調査において、特にアマにかかわる記述は見つけられていない。

2. 地方行政によるアマの記述——三重、福岡、熊本、千葉、宮城、長崎県の「漁業誌」

続いて、先の『日本水産捕採誌』にアマ漁を行っていると記されていた 5 つの地域、すなわち、志摩（三重県）、筑前（福岡県）、肥後（熊本県）、安房（千葉県）、陸前（宮城県）の各県で編纂された「漁業誌」や「図説・図解」、それに加えて、同『捕採誌』の完成以前に編纂されていた長崎県の「漁業誌」から、そこに記載されたアマについて見てみたい。

1) 志摩（三重県）のアマ

地方行政による漁業誌編纂事業の先駆の一つである三重県勧業課編纂の『三重県水産図説』（1880）は、明治 12（1879）年に行われた三重県の水産調査に基づき、県内の漁具漁法を地域別に画図に表すよう編纂され、同 14（1881）年の第 2 回内国勧業博覧会に出展されたものである（中田、1984）。

Fig. 1 蜑婦焚火休足之圖

同図説には、アマ漁についても誌面が割かれており、その作業手順と上半身裸の「蜑婦」2 人の姿が「鰒漁蜑婦之圖」に、そして焚火を囲んだ蜑婦の休息姿や波間に浮かぶアマ漁の様子が「蜑婦焚火休足之圖」（Fig. 1）に描かれている。これら両図からも、志摩地方でのアマ漁は「婦人の業」であり、「蜑婦」によって営まれていたことが詳細に伝わってくる。

さらに、その出展 2 年後の明治 16（1883）年、東京上野公園で初めて開催された第 1 回水産博覧会にも、三重県勧業課によって『三重県水産図解』(1883) が出展されている。同博覧会の目的は、繰り返しになるが、漁業技術発展の実態を把握し、先進地域の優良技術を他地域に普及させることにあった。

同図解は、『三重県水産図説』の記述不足を補いつつ漁法や魚種について調査したものであり、アマの姿も『図説』と同様、アマ漁を終えて火を囲み暖をとる「蜑婦」の様子が「蜑婦焚火ニ躰ヲ温タメ休足ノ圖」に描かれている。また、同図解の「鰒一名石決明」の項には「蜑婦」や「漁婦」による漁法について、そして「製造法」の項には熨斗鮑などの製作方法についても、その内容が詳細に記述されている。

2) 筑前（福岡県）のアマ

これも漁業誌の先駆の一つである福岡県勧業課編纂の『福岡県漁業誌』(1878) は、前出の『三重県水産図解』と同様、明治 16（1883）年の第 1 回水産博覧会に出展されたものである。そして同誌には、筑前国の「石決明海女漁」についての記載、並びに、その海女漁の様子が描かれている。同誌では、アマは「海女」とだけ記されており、「海女ハ各裸体トナリ褌帯ヲ着シ腰ニ〔藁〕帯ヲ装フ」(91 頁) と説明されている。

また、同誌の図説にあたる『福岡県漁業誌（附図）』には、海女漁の様子が「海女漁業景況」（Fig. 2）として描かれており、明治政府による『日本水産捕採誌』の指摘通り、同県におけるアマ漁が「婦人の業」だと確認できる。

Fig. 2 海女漁業景況

他にも、同誌完成の翌年、福岡県第二課によって編纂された『福岡県物産誌』(1879) は、明治 10（1877）年の福岡県内の漁業調査をもとにした物産誌だが、その物名「鮑」の項目に、宗像郡の鐘崎や大嶋をはじめとした産地名とともに漁撈慣行も記載されており、アマ漁についても触れられている。そこには、「此漁業潜女ノ業ナリト雖トモ其他ノ漁夫モ之ヲ成ス」(40 頁) と記され、アマ漁は女性である「潜女」の業ではあるものの、男性アマである「漁夫」によっても行われていることが記述されている。

3) 肥後（熊本県）のアマ

福岡県や三重県に続いて、明治 23（1890）年の第 3 回内国勧業博覧会の開催にあたり、熊本県が県内の漁撈や漁具について調査・編纂したのが『熊本県漁業誌』(1890) である。同誌の「緒言」には、熊本県 1 市 15 郡のうち 7 郡が海に面し、そのうち生計の主たる部分を漁業に依っているものが 7 割もあるが、旧来の慣例や規則を無視した乱獲によって不漁が続いていたため、漁具漁法を調査し、漁業の回復に向けた試みの一環として同誌が編纂されたという。

そして同誌には、「潜水漁」として同県天草郡二江村の海士による潜水漁の様子（Fig. 3）が、水中眼鏡などの漁具の図画とともに記載されている。

Fig. 3 潜水漁

また、同二江村における潜水漁の記述は、同漁業誌以前の明治 16（1883）年に刊行された『熊本県水産誌』にも記

載されており、かつ、その後の『日本水産捕採誌』でも同地のアマ漁が紹介されており、同地は熊本県で潜水漁を行う村としての知名度が高かったことがうかがえる。そして同地のアマ漁は、男性である「潜夫」によって行われており、同漁業誌によれば、鮑や海藻取りを専業としているものの、望まれれば「魚類ヲ捕ヘ或ハ海底ノ沈没品ヲ拾フ」（1890、19 頁）という。

4) 千葉県及び宮城県のアマ

千葉県もまた福岡県と同様、明治 16（1883）年の第 1 回水産博覧会に『房総水産図誌』（1883）を出展したが、同誌にアマに関する図や記述はなく、その後、熊本県と同様に同 23（1890）年の第 3 回内国勧業博覧会に出展された『千葉県漁業図解』（1890）にもまた、アマについての記述は見受けられない。

他方、宮城県については、第 1 回水産博覧会に出展された『宮城県漁具図解及び略解』をもとに、明治 21（1888）年に出版された『宮城県漁具図解』において、少しだけアマ漁について触れられている。

同図解の図引第廿八号「鮑捕具」（図引、23 頁）には、褌姿で素潜り漁を行っている海士の姿が描かれている（Fig. 4）。その解説には、鮑取りが「水中に潜り岩礁の在るところに泳ぎつけ鮑鰒のとりつきし所をみとめ」採取する漁法、あるいは、鉾状の道具を使って船上から「引掛けとる」漁法として記されている（解説、27 頁）。

Fig. 4 第廿八号一圖

宮城県の同図解において、素潜りアマ漁は、鮑取りの漁法のひとつとして記述されるに過ぎず、その漁法を行う漁師にたいする特定の名称すらも触れられていない。

5) 長崎県のアマ

複数他県と同様、明治 23（1890）年の第 3 回内国勧業博覧会開催に際し、長崎県が『漁業誌』を完成させている。同誌もまた、その「緒言」によれば、旧来の漁法を固守する漁師に漁法の改良や漁獲物の繁殖を促す目的のもとに編纂され、アマ漁についても「鮑採業」の項の中に、その漁具漁法や画図などが記載されている。

同県における鮑捕りには 3 種類の漁法（素潜り・鉾突き・潜水器）があり、そのうち素潜りアマ漁が「海士裸体ニテ海底ニ潜ミ手採リ」（113 頁）によって行われているという。そして、アマ漁については、県内で盛大に行われている複数の地域名とともに、「各所トモ男子ノ業」（同上）と記載されている。

なお、同誌には、鮑捕りのうち鉾突き漁と潜水器漁は小さな鮑を捕ってしまう害があるので、規則で取り締まりを行っていることも指摘されている。

以上、ここまで見てきた通り、地方行政による「漁業誌」や「図説・図誌」におけるアマの記述から、先ずは、明治政府による記載が各地方の調査を参考にして編纂されていることがわかるだろう。そして、各地方におけるアマ漁は、その細部にわたる慣習や漁具が地域によって多少は異なるものの、男女共に営まれており、女性は「蜑婦」や「海女」、「潜女」、男性は「漁夫」や「海士」、「潜夫」と称せられていた。これら明治政府の「水産誌」及び地方行政の「漁業誌」や「図説・図誌」からは、特に女性の素潜り漁業者（海女）のみが注目された形跡は見られず、アマ漁そのものに対する関心のみが伺えるのである。

さらに、長崎県の漁業誌からは、素潜りアマ漁が、同じ潜水漁である鉾突き漁や潜水器漁とは区別されており、素潜り漁を行う者のみをアマと記述していたことが確認できる。そしてアマ漁は、沿岸での旧来的な漁法の一つとして改良の対象となる漁法ではなく、むしろ近代的な潜水器による乱獲を防ぐ漁法として記録されたとも考えられる。このことは、素潜りアマ漁が、現在の持続可能な漁法として注目されている視点（小暮、2020）と同様の取り上げられ方をしているとも言えるだろう。

それでは、このような男女の区別が特段の差異と認められていなかったアマ漁の調査報告から、なぜ、海女だけが注目を浴びるようになったのか。大正・昭和戦前期と時代を追って、引き続き見ていくこととする。

第二章　大正・昭和戦前期のアマ——婦人労働者・潜水労働者としての海女

明治後期に至り、旧来的な漁場利用の追認的規定に対して近代的な法規定を整えるため、明治 34（1901）年、日本で初めての漁業法（明治漁業法）が制定された。さらには、同 43（1910）年、同法を全面的に改定する形で、漁業権や入漁権の規定が明確化され、漁業組合事業や漁業取締に関する規定が拡大されていく。このような漁業の近代的法整備に伴い、アマ漁も含めた漁業についての国や地方行政による実態調査はいったん区切りを迎えることになる。そして大正期に入ると、アマへの関心は、特に「女性労働の問題」として、海女へと眼差しが向けられ始めていくのであ

る。

そこから本章では、明治期から昭和初期への移行過程として、大正期の調査文献に記述されたアマについて、そして昭和戦前期に「女性労働の問題」への関心から現れた労働科学や潜水労働者に関する調査研究、さらには海女の身体への関心に特化した医学・生理学的研究、それらの諸文献に記述された海女の姿について見ていきたい。

1. 大正期の調査文献におけるアマの記述——三重県における蜑婦の調査

大正期には、三重県の海女に関する限定的な調査ではあるが、後述する昭和戦前期の労働科学につながるような調査としての『蜑婦労働問題の研究』(1917) と、三重県による行政調査である『保健衛生調査 第貳輯』(1921) が報告されている。

1) 『蜑婦労働問題の研究』

同書の著者、京都帝国大学の法科学生たる伊丹萬里は、女性の労働問題が経済の問題のみならず社会全体の問題であり、その女性労働の研究かつ漁村問題の一資料として、蜑婦労働の経済的・社会的研究を企画・執筆したという。本書において伊丹は、アマ漁が朝鮮済州島や日本沿岸各地域に存在するにもかかわらず、特に志摩の蜑婦を調査対象とした理由について、以下のように記している。

> 女子の潜水労働に従事する者は、朝鮮済州島及び志摩沿岸を以て本場となし、他は殆んど蜑男にして、遇々蜑婦を見るも、こは多く志摩蜑婦の出稼人たるに過ぎず。而して本研究は主として志摩沿岸に於ける蜑婦労働に関するものなる……。(2-3 頁)

すなわち、伊丹は、多くのアマ漁が男性たる「蜑男」によって行われているものの、女性労働を調査するために、志摩の「蜑婦」を選んだと述べている。換言すれば、本書の主眼はアマにではなく、女性労働としての蜑婦労働にあったのである。

そして同書は、当地の蜑婦労働の来歴から始まり、その労働の実態、健康状態や家庭環境、風紀の問題について、調査がまとめられていく。結果、蜑婦労働は未開拓の漁場を持つ他の漁村に対して奨励すべき女性労働であり、そのような労働が「我が国民経済上にも至大の影響を及ぼすに至る」(110 頁) と結論づけられている。

同書において、女性労働の「問題」とは、当時の女性の労働力が、近代資本主義的な機械産業における労働者を供給する労働市場（近代的労働市場）に包摂されていない、つまり女性が近代的な意味で「労働者」として見なされていない状況にあり、前近代的な漁村における重要な「労働者」として「蜑婦」が注目されたのである。それは法科学生たる伊丹の指導教員、神戸正雄によって書かれた「序文」にも指摘されており、曰く、本書は「日本女子が勤勉励精なる水産労働者たることに至ては尚未だ多くの人の注意を惹いて居らぬ」(序、1 頁) ことを明らかにする研究だと述べられている。そして、「我海國の前途を祝福せざるを得ぬ」(同上、2 頁) との賛辞が送られている。

ここに、海女に特化された眼差しが、その女性労働に向けられていたことがわかるだろう。そして、健全なる労働力は健全なる身体に宿る、というロジックにもつながっていくのである。

2) 『保健衛生調査 第貳輯』

本調査は、大正 9 (1920) 年、三重県の保健衛生事業の一部として、同県内の健康地における衛生状態の調査を行い、健康保持の要因を探るとともに他地域の健康増進の参考にすることを目的に調査・編纂されたものである。同調査では、その前年に行われた非健康地を対象とする第 1 回目の調査 (同『第一輯』) の対照項として、現志摩市の御座他 6 村の海女を対象者に調査が行われている。

結果、同地域における健康保持の理由として 6 つの主要因が挙げられ、さらなる改善策として、公衆衛生の必要性が唱えられているのである。それら主要因の中でも、同地域で特徴的なのが「多食多働」であり、当地の海女は、潜水作業のみならず農作業や家事にも従事する激務のため、十分な睡眠と栄養補給を行っていることが特記されている (129-130 頁)。そこから、海女の食事内容や回数、献立、滋養的嗜好品なども調査され、海女の健康保持の理由が探られている。

本来、同調査は健康者の多い「地域」を対象としたものにもかかわらず、調査対象が「人物」である海女、すなわち女性労働者に特化されている。それゆえ、その内容が、海女の労働や生活習慣、身体的特徴に多くを依っているのである。このことだけを見ても、同調査が、そもそも健康体である海女に一義的な関心を抱いていたことは間違いないだろう。

なお、本調査の中から「第十「あま」ニ就テ」の章が抜粋され、別途、同衛生課編『蜑婦ニ就テ』(1921 年) としてまとめられていることからも、その関心の高さがうかがわれるだろう。

以上のような大正期の海女に向けられた関心は、その後、近代的労働市場に包摂された女性労働の主体として、さらに、その健康な身体へと注がれ、海女は大正後期から昭和戦前期における労働科学や医学・生理学という学問分野の調査研究対象となっていくこととなる。

2. 労働科学及び医学・生理学におけるアマの記述——婦人・潜水労働者とその身体への関心

先ず、「労働科学」とは、大正後期から昭和初期にかけて、後の経営労務・労務管理論として成立・発展した学問分野である。それは、医学や心理学の観点から始まり、生理学や衛生学の視点が加わっていった。それゆえ、「労働科学は、労働者の労働力が発動される労働の場に発生する諸問題に即して、主に自然科学的解明をおこなう学問」(裴、1997、ii 頁）として位置づけられている。そのような学問において、海女は、婦人労働者や潜水労働者という「特殊性」から調査対象に俎上してくることになるのである。

さらには、調査者たちの学問的出自・関心に基づき、医学や生理学に特化した研究も行われ、女性としての海女の身体そのものへの調査研究も推し進められていくことになる。

1) 婦人労働者としての海女

学問としての労働科学かつ労働科学研究所の「創設者」たる暉峻義等は、医学部卒業後に生理学の研究に従事しつつ、大正 5（1916）年に警視庁保健衛生事務嘱託となり、東京市本所の「貧民窟」の人々に対する健康状態の調査などを行っていたという（三浦、1991、47-67 頁)。その後、暉峻は、その関心を地域社会における公衆衛生から産業界における労働者の健康状態に移し、当時、機械的産業によって駆逐されつつあった「原始的労働」に関する資料収集及び研究を企図した。そこから原始的労働としてのアマ漁、特に海女に注目することになる（同上、153 頁)。そして、暉峻は、「現代の機械的生産労働に従事する婦人労働者と対比する」（暉峻、1928、725 頁）ために、昭和 2（1927）年、その潜水作業の生理学的調査を行ったのである。

その調査結果が「海女の研究」(1928）として発表されている。なお、そこには、調査対象者がどの地域の海女なのかの明確な記述はないが、その発表の前年に志摩地方和具の海女についての暉峻の文章が残されており、その内容からも同研究の対象者が和具の海女であることがわかる。

そもそも医学者である暉峻が関心をもったのは海女の骨盤の発育であり、なぜならば「機械的産業のもとに労働する婦人労働者は、その骨盤の発育に障碍を受ける」(暉峻、1927、6 頁）からだという。そして、都会化されていく工場婦人労働者と比べて「海女の肉體は婦人労働者としてもち得る最善のもの」（同上）だと称賛している。

この暉峻が設立した労働科学研究所の海女の研究には他にも、同研究所の所員であった小川惟熙（1929）による紡績婦人労働者と海女との比較研究が挙げられる。小川の関心もまた、「機械的強制的労働に従事する婦人労働者の發育障碍」（100 頁）について、すなわち、明治期以降に近代的労働市場に組み込まれた女性労働者の身体的影響についてであり、必ずしもその関心がアマにあったわけではない。

そこから、同研究以前に行われた調査の対象者たる「婦人の機械的産業活動の最も主要部分を占むる紡績工業に従事しつゝある婦人労働者」（45 頁）との比較において、「原始的労働者」としての海女の身体調査が行われたわけである。

同調査では、百数十名の海女に対する身長体重から胸囲の測定、さらに半裸の全身撮影にまで及び、婦人労働者の生活様式及び生活環境を前提としつつ、特に工場労働者と海女との身体的差異が注目されている。

結果、小川は、海女の身体的優位性を列挙した後、「機械的産業労働はそれに従事する發育未完成の労働者の身體的發育を著しく阻止障碍すべし」（100 頁）と結論づけている。すなわち、同研究は、そのような結論を導くための対照項として、海女に対する調査が行われたと言っても過言ではないだろう。

なお、同論文の中には、海女の上半身裸の写真も掲載されているが、その写真が海女の身体的優位性を示す根拠にも利用されておらず、その掲載に学術的意味を見出せないばかりか、海女に対する女性労働者としての眼差しに加え、都市男性たる研究者による性差別的かつオリエンタリスティックな眼差しも読み取ることができるだろう（参照：小暮、2014)。

2) 潜水労働者としての海女

このような労働科学における調査研究と同時期、海女への眼差しは、その近代的労働市場に組み込まれた女性労働者の身体的影響に関する対照項としてのみならず、潜水労働という「特殊労働」に関する調査研究にも現れてくる。

潜水労働者に対する全国調査の嚆矢として挙げられるのが、昭和 6（1931）年に出版された千葉県学務部社会課による『潜水労働者に関する調査』である。同調査では、「俗に『あま』と稱する潜水労働者」に対して、全国の分布調査、並びに、県内の文献調査及び実地調査が行われている。

ここでの「潜水労働者」とは、「潜水に依て海の魚介類藻類を採捕する」（2 頁）者を指しており、「『あま』といふと最も狭義に解すると婦人の潜水者に限るごとく思惟さるゝが常であるが、必ずしも女のみとは限らない」（1 頁）ことが指摘されている。すなわち、同調査では、男女の区別を行わず、素潜り漁業者、さらには機械潜水者も含めた労働者が、その調査対象者となっている。

それゆえ、同調査は、あくまで潜水労働者の調査であり、海女に特化した記述は、その労働事情についてのみ触れられているに過ぎない。また、全国的に「本業には女子より男子が多く副業には男子よりも女子が多い」(6 頁）ことも的確に指摘されている。

しかしながら、同調査の資料収集にも加わった安田亀一の講演記録が、昭和 6（1931）年に『「海女の生活」の研究』

として出版されており、同書の中では、潜水労働者のなかでも海女が殊更に特化して語られている。そこでは、外房州の「妙な風習」として、「女が働いて男を食べさせてゐること」（12 頁）が挙げられ、「其の勤労生活に至つては、一般婦人に對して大いに氣を吐くに足るもの」(20 頁)だと、海女の勇ましく意気盛んな姿が称賛されているのである。

さらに安田は、その 2 年後の昭和 8（1933）年には、『海女の生活』を著しており、その中では、海女について、以下の通り、大和民族の誇りたる「海国婦人」だと最大の賛辞を送っている。

> 婦人の身で裸一貫直接身を躍らして海に入り、時代に背を向けた極めて原始的な方法ながら無盡蔵の海の幸を探る労作、殊にその生活はともすれば退嬰に陥り易い婦女子の弱點を一蹴して、海国婦人の勇敢さと純朴さを見せてゐる職業がある。俗に之を「海女」という。（2 頁）

このように、安田にとっての海女は、特殊な潜水労働者としてよりも、男を食わせる婦人労働者であり、かつ、勇敢で素朴な「海国婦人」であり、さらには「大和民族の誇り」として捉えられ、殊更に、その女性性が注視されている。ここには、本業としては女性よりも男性の方が多い潜水労働者の調査にもかかわらず、海女のみに特化して語るロジックを読み取ることができる。すなわち、安田の言説には、近代的労働市場のみならず、国家主義にも包摂された海女の姿を見出すことができるだろう。

また、同時期には他にも、名古屋地方職業紹介事務局（1934）によって、三重県志摩半島の各地域における海女の実態調査も行われている。そこでは、同地域において海女が多いという、その「婦人の特殊労働を発生せしめたる」（谷川、1990、511 頁）要因として、陸の資源に乏しいものの海の資源に恵まれている同地域の経済的理由が指摘され、さらには、志摩地方一帯の経済的不況下における海女の勤労姿勢が讃えられている。

そして、このような婦人労働者及び潜水労働者としての海女に対する関心は、その後の昭和 10 年代には、その身体への医学・生理学的関心へと移ることになるのである。

3) 海女の身体への医学・生理学的関心

昭和 11（1936）年、三重県衛生課の山本憲一は、「本邦ニ於イテ特殊ナル職業ニ従事スル海女」（1936、167 頁）かつ「三重懸ノ産業ニ重大ナル影響ヲ有スル海女」（同上、169 頁）を調査対象として、「海女ナル業態ニヨリテ招来スベキ病變ヲ精査」（同上、168 頁）している。すなわち、三重県官吏の立場から、同県の経済的影響力を持ち合わせる特殊な職業たる海女に特有な疾患の調査を行っているのである。同調査では、労働科学的な調査方法と同様、同県の紡績工場の女工及び一般女性とを対比させ、その結果、「海女業ト特ニ関係深キモノ」（176 頁）として耳鼻に関する疾病を挙げている。

また、この調査が発表された同年、愛知県を中心とする東海地方や北陸地方の医師を対象にした医事評論誌『関西醫界時報』（1936）には、志摩地方の医師が、「眞珠母貝採取の性質上速かに治療して就業し得るようにすることが必要」（23 頁）なため、海女の罹患する「獨特の奇病俗稱『いら』及『おこぜ魚』の刺創」（同上）の治療法が見つけられたことも報告されている。

さらに三重県以外の土地でも、海女の生理学的特徴について、石川県輪島における調査が、生命保険会社に所属する中川正重（1944）によって行われている。同調査では、海女がその潜水作業（特に「息こらえ」）によって高血圧ではないかとの仮説のもと、「餘暇を以て海人の血壓測定を実施した所、豫期に反する結果を得、却つて興味を覺え、測定を一般男子老幼者にも及し」（27 頁）、能登の老若男女に対して血圧測定が行われている。その結果、対象者は全体として低血圧であり、中川はその原因として「副食物として海藻類を多く摂取すること」（32 頁）を挙げている。

以上のように、大正期及び昭和戦前期における海女の記述は、先ずは、近代的労働市場に組み込まれた女性労働者の身体的影響に関する対照項として、その主たる関心が向けられ、その後、特殊な職業に従事する労働者としての海女に対する医学・生理学的な関心へと移行していったことがわかるだろう。このことは、同時期に行われた潜水労働者に対する職業調査とも相まって、海女への視線を、その身体へと向かわせたと言えよう。

また、それと同時期、海女への関心は、国家主義に包摂される形でも特化され、かつ、消えゆく伝統文化への浪漫主義的な憧憬や国家主義の高揚とともに生まれた（と言い得る）民俗学という学問分野でも生じてくるのである。

第三章　昭和戦前期のアマ——民俗学調査に記述されたアマ

明治期、近代的な漁業技術の模索を伴って、停滞状況にあった漁業に対する政府や地方行政による漁業調査が行われたことを契機に、アマに対する関心が徐々に醸成され、大正期に入ると、女性労働の問題として、特に海女に、その眼差しが向けられていった。

さらに昭和戦前期、その眼差しは、労働科学や医学・生理学を通して、潜水労働者かつ婦人労働者たる海女に、そしてその身体に向けられていったと言えよう。加えて、海女への視線は、昭和期に入って、伝統文化への浪漫主義的な憧憬や国家主義の高揚を伴った民俗学においても現れてくることになる。

そこから本章では、漁村民俗学の先駆的存在とされている桜田勝徳、続けて同時代、アマに眼差しを向けた郷土研

究者たち、そして特に海女について数多くの著作を残した瀬川清子によるアマの記述を見ていくことにする。

1. 桜田勝徳によるアマの記述――「漁村や漁民の生活について調査した最初の人」（宮本、1980、401 頁）

桜田勝徳は、民俗学の生みの親とも言うべき柳田国男に師事していたが、父親の博多赴任に伴って九州に移り、それを契機として九州を中心とした漁村探訪が始まり、特に西南日本（福岡県や山口県）のアマ漁に関する著作を残している。昭和 9（1934）年、桜田は、これら一連の漁村調査の結果を取りまとめて『漁村民俗誌』を出版し、特に北九州地方や九州西岸地域を中心としたアマ漁について、「蟹の咄」というタイトルで発表している。

同書では、アマが漁で使用する「鮑がね」を始めとする漁具の形状的差異を通して、日本に分布するアマの系統について考察されている。ここでの桜田の関心は「裸海人」、すなわち素潜り漁業者であり、銛突き漁にも関心が向けられ、「恐らく此両者は全然別物ではなく、いはゞ同じ流れの上と下に隣り合せて浮ぶの類」(2 頁) だと推察されている。

このようなアマへの視線は、漁法としての素潜りアマ漁に関心をもった明治政府や地方行政におけるアマへの関心に類似していると言えよう。ゆえに、桜田の眼差しは、例えば、以下のような記述にも表れている。

> 筑前宗像郡の鐘崎、長門大津郡の北浦……は共に女海士の大浦である。北浦の蜑の数はおよそ百七、八十人で、此地の婦人の大部分は潜水作業に従事している。鐘崎は四百人と云われた以前からみれば、海士の数は大いに減じているが、それでもダカアマをも合わせれば今尚百人位はいる。（1934、2-3 頁）

このように、桜田の海女に対する表記は、「女海士」「蜑」「海士」という言葉が混在しており、各地域の特徴としてアマの性別も記されているが、特に性別による差異については重要視されていない。それゆえ『漁村民俗誌』では、「蟹の咄」に続いて、同じ素潜り漁業者によって行われる「銛漁の事」に話が進んでいくことになる。

桜田のアマへの視線は、戦後になっても変わらず、アマ漁の性別分化、特に女性アマの多い地域がある理由について、女性の生理的適性（皮下脂肪の厚さ）といった俗説よりもむしろ、明治期以降の漁業技術の近代化や沖合への漁場領域の拡大を伴って、男性は近代的漁業に組み込まれた結果、男性によるアマ漁が減っていったことが挙げられている。

しかしながら、鮑は古くから貴重かつ高価な水産物であったことから、鮑捕り自体は継続しやすい条件にあり、海士ではなく海女が存続したと、桜田は推察しているのである（桜田、1959）。

この考察からも分かるように、桜田のアマへの眼差しは、海女に特化するものではなく、むしろアマ漁を成立させている漁村の社会・経済構造、並びに、時代変遷に向けられていたことがわかるだろう。そして、昭和戦前期においては、桜田以外にも、その内容の如何を問わず、アマに注目していた郷土研究家たちが複数存在していた。

2. 郷土研究家たちによるアマの記述――壱岐と志摩のアマ

1) 壱岐のアマ

桜田の漁村調査と同じ頃、山口麻太郎もまた、地元の壱岐島に関する民俗調査を行い、昭和 8（1933）年には「壱岐の小崎蟹に就いて」という調査報告を発表している。さらに翌同 9（1934）年には『壱岐島民俗誌』を著し、その中に同報告も収録されている。

しかしながら、山口の関心は必ずしも漁村やアマについてではなく、地元の壱岐の民俗についてであった。そして、小崎地域の蜑については、遠洋漁業や機船漁業に取り残されて困窮しているアマの現状に触れられてはいるものの、その歴史や信仰、方言などに誌面の多くが割かれている。

ちなみに、壱岐には八幡と小崎の両地域にアマがおり、「八幡あまは女が主として潜るのであるが、小崎蜑は男ばかりである。小崎にももとは女蜑も居たらしく、かすかに記憶されては居るが、それは極めて稀な例であつたらしい」（1934、195 頁）。よって、山口の行った調査対象者である小崎の蜑はすべて男性（海士）であり、山口の報告に海女に関する記述は、ほぼ見当たらない。

しかも、そこでの小崎蜑（海士）は、八幡蜑（海女）の更生した状況に反して、酒ばかり飲んでおり、「村の當局からは其の更生どころか一の厄介者として冷視され、村の人々からも小崎者として賤しめられ村の癌として嫌はれて居る」（195-196 頁）とまで酷評されているのである。その視線の先には、海女のみならず、民俗学者たちが抱いたであろう消えゆく伝統文化への浪漫主義的な憧憬すら見つけられないような報告となっている。

2) 志摩のアマ

他方、壱岐とは異なり、海女の多い三重県志摩地方でも、同時期、海女に関する調査が行われている。昭和 9（1934）年には、郷土研究家であり画家でもあった岩田準一が、柳田国男らの編集する『島』に「志摩の蜑女作業の今昔」という調査報告を発表している。

同報告では、海女の風俗や信仰、伝承や方言などに、その多くが費やされている。しかも、海女の漁具漁法の記述については、『島』投稿時に紙数が少ないゆえに追補を求められており（89 頁）、結果、同報告においては、その追補がそもそもの記述以上の分量を占めている。

また、同報告の中には、当時、土産物として販売されていた写真絵葉書も数葉掲載されており、そのような絵葉書の視線が画家でもある岩田に何らかの影響を及ぼしていたことも推し量れるだろう（参照：小暮、2014）。

すなわち、岩田の主たる関心は、素潜りアマ漁そのものや海女の生活にはなく、海女の風俗や信仰、その伝承にこそあったと言えよう。そして、そのような視線は、その後、渋沢敬三主宰のアチックミューゼアム同人となった岩田が昭和 14（1939）年に刊行した『志摩の蜑女』に、さらに色濃く表れている。

同書は、全 5 章で構成されており、第 1 章「蜑女作業の今昔」、第 2 章「蜑女の神事」、第 3 章「蜑女の傳説と歌謡」、第 4 章「海の魔」、第 5 章「蜑女に関する語彙」と続く。この章題を見ても分かるように、岩田の関心は、海女に伝わる信仰や伝承、特に怪異現象（例えば、「ともかつぎ」）についてである。すなわち同書は、海女に関する「昔話の採集」報告であり、繰り返しになるが、岩田の主たる関心がアマ漁そのものや海女の生活にはないことがわかるだろう。

加えて同書の刊行前後、岩田は、『昔話研究』や『民間伝承』、『旅と伝説』といった雑誌に、志摩地方の民俗資料や採集報告を寄せているが、それらもまた、海女に特化したものではない。実際、同書の刊行翌年には、海女に関する著作ではない「志摩の漁夫の昔がたり」（1940）を発表している。

岩田によれば、そもそも自らの関心である地元である志摩地域の「昔話の採集」が失敗してしまったため、「それ以後神事や頭屋の採集に取りかゝった」（1941、66 頁）という。その過程で、海女に出会うことになるのではあるが、海女はあくまで二義的な関心対象であったことがわかる。

また、岩田の「志摩の蜑女作業の今昔」が掲載された『島』には、地理学者であった山口貞夫も「志州の島々」と題して鳥羽神島及び答志島の海女について触れているが、海女に関する部分はその漁具漁法についてのみの報告であり、やはり、同島々の信仰や行事などが主たる関心事となっている。

しかしながら、奇しくも同号の『島』には、昭和戦前期の民俗学において、特に海女に注目し、柳田国男に師事して漁村調査を行った瀬川清子の「処女作」も掲載されていたのである。

3. 瀬川清子によるアマの記述――「女でなくては出来ない仕事」（柳田、1942、1 頁）

昭和 8（1933）年、瀬川清子は、雑誌「アサヒグラフ」に掲載された能登半島舳倉島の海女の写真に魅せられ、夏休みを利用して当地を訪れたという（倉石、2009、33 頁）。ちなみに、同年「アサヒグラフ」6 月 14 日号（Fig. 5）は、舳倉島の海女の上半身裸の姿が表紙を飾っており、瀬川が魅せられた写真は、同表紙、あるいは同誌に掲載された記事のものだと容易に推測できる。ある意味、瀬川の民俗学研究の発端が、雑誌メディアにおける海女の表象であったことは、後述する瀬川の自戒にもつながっているかもしれない。

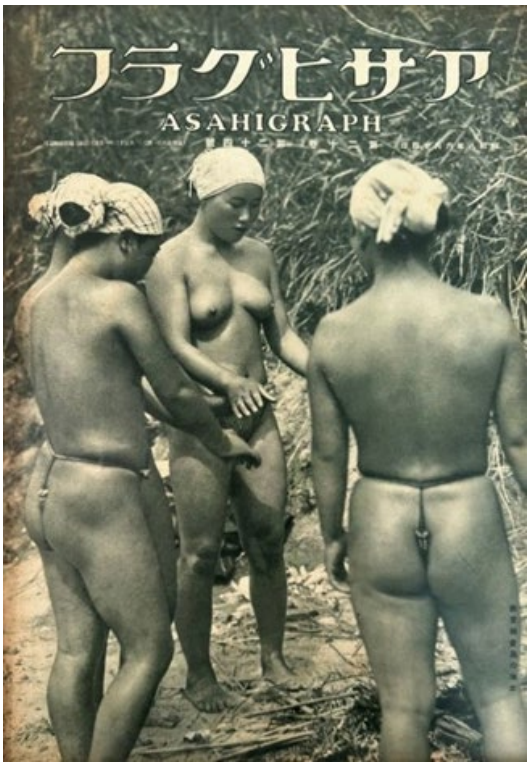

Fig. 5「アサヒグラフ」1933 年 6 月 14 日号表紙

舳倉島を訪れた翌年の昭和 9（1934）年、瀬川は、当地の海女についての見聞録である「舳倉の海女」を柳田国男らの編集する『島』に投稿する。柳田はこれを高く評価し、自らが主催する研究会に瀬川を呼び、当時計画されていた全国の山村調査や海村調査に瀬川を参加させることになったという。

なお、この海村調査は、日本学術振興会の補助による「離島及び沿海諸村における郷党生活の調査」として、昭和 12（1937）年から同 14（1939）年までの 2 年間、全国 30 ヵ所の海村において行われたものである（柳田、1949、435 頁）。その報告書は、柳田国男編集による『海村生活の研究』（1949）として戦後に出版されているが、同書全 25 章のうち、瀬川の報告は、「海村婦人の労働」、「蜑人の生活」、「海辺聖地」、「海上禁忌」、そして「血の忌」の 5 章分が掲載されており、そのうち 3 本が女性に関連した報告になっている。そして表題通り、「蜑人の生活」では、海女の生活が報告されているのである。

そのなかで瀬川は、「蜑人（アマ）」とはかつての漁業者一般の呼称ではあるものの、日本ではアマの数が世界有数であり、「その潜水作業に女子が参加してゐる事も特色」（129 頁）だと記している。そこから主に、日本各地（福

岡、山口、石川、徳島、三重、千葉等）の海女の生活や習俗について、その姿を詳細に書き進めていく。

そして、アマ漁は原始的であるため、その生活には「古い時代の漁人の生活を想像させるいろいろな材料がある」（158 頁）と考え、海女に「漁人の移動性」を見い出し、さらには、海人によって開拓・発展されたであろう「日本の商業史」にまで思いを馳せていくのである。

同報告のもとになった海村調査の終了と同じ昭和 14（1939）年、瀬川は海女の調査に特化して『海女記』（三国書房）を発表している。そして、同書に序文を寄せた柳田国男は、この著書が「女でなくては出来ない仕事」（1 頁）であり、「女であるが故に、しようと思へは斯ういふ仕事が出来た」（3 頁）と瀬川を賞賛している。

すなわち、柳田は、女性研究者が同性である海女という対象を調査することによって、男性研究者が触れ（られ）ないテーマを設定し、男性研究者にはわかりづらい視点からの調査が可能になると述べているのである。実際、柳田は、「『民俗学には女が必要である』『民俗学は女の人が研究しなくちゃダメだ』」（瀬川、1962、153 頁）と、常々瀬川に語っていたともいう。

このような柳田の「指導」のもと、瀬川は海女に特化した調査研究を続けていくことになる。すなわち、柳田は女性研究者による女性に関する調査を重視しており、結果、瀬川はアマではなく海女の調査研究を行うことになったわけである。

そもそも、瀬川の関心は「女性の働き」にあったという。そのことについて、瀬川清子研究者の岡田照子（2012）は、昭和 11（1936）年の瀬川の講演会を参照して、次のように指摘している。「瀬川は、〈なぜ、女の地位が低くなったのか〉、〈女の地位を低くしたものは何か〉を問い続け、『女性劣位』をなぜ、女性自らが認めるようになったのかを問題とした」（36 頁）という。

しかしながら、後に瀬川自身が述べているように、「私の関心が単に漁撈者としての海女に偏したために男あまへの注意をおろそかにした結果、ついに海女そのものを的確に知ることが出来なかった」（瀬川、1970、102 頁）という。つまり、自らの真の関心が、海女に特化した調査研究によって、必ずしも果たし得なかったことを自戒しているのである。

瀬川は、「女性の働き」の研究とは、海女だけでは見極めることが難しく、海士も含めたアマ漁を行っている素潜り漁業者に対して、さらに彼・彼女らが生活を営む地域の社会構造全体に対して注視する必要があったことを指摘しているのであろう。これは、「海士の数が予想外に多く、且つ全国的に散在しているにもかかわらず、あまといえば多くの人は海女を連想する」（同上、104 頁）という、海女のみに注目される状況に対しての警句としても受け取れるのである。

おわりに

明治期から昭和戦前期に至るまでの間、なぜ、素潜り漁業者（アマ）のなかでも、女性である海女だけが注目されてきたのだろうか。本稿では、この問いを明らかにするため、明治期の政府・地方行政資料から、大正・昭和戦前期の学術的な調査研究に至るまで、そこに現れた海女の姿を系譜的に追ってきた。

明治期、近代的な漁業技術の模索を伴って、停滞状況にあった漁業に対する明治政府や地方行政による漁業調査が行われたことを契機に、素潜り漁業者（アマ）に対する記述が現れ始めた。そこには、日本沿岸での旧来的な漁法の一つとして改良の対象となる漁法としてではなく、むしろ近代的な潜水器による乱獲を防ぐ漁法として記録されたとも考えられ、素潜りアマ漁が、現在注目されている「持続可能な漁法」と同様の視点から着目されたとも言い得るだろう。そして、そのような視線は、男女の区別のないアマへと向けられていた。

しかしながら、大正期に入ると、女性労働の「問題」として、海女に眼差しが向けられていくことになる。そもそも当時の女性労働は、近代的な労働市場に包摂されていない状況にあり、前近代的な漁村における重要な労働者として、海女が注目されたのである。ここにおいて海女は、近代的な眼差しに曝され始めることになる。

そして昭和戦前期に入ると、海女は、労働科学や医学・生理学といった学問分野を通して、近代的労働市場に組み込まれた女性労働者の身体的影響に関する対照項として、その主たる関心が向けられ、その後、いわゆる「特殊」な職業に従事する労働者の身体に対する医学・生理学的な関心へと移行していったのである。

また、それと同時期、海女への関心は、国家主義に包摂される形でも特化され、かつ、消えゆく伝統文化への浪漫主義的な憧憬や国家主義の高揚とともに生まれた（とも言われる）民俗学という学問分野にも現れてきたのである。

すなわち、学術的な調査研究対象としての海女への視線は、労働市場の近代化や国家主義の高揚という時代背景のもと、徐々に醸成されていったものだと考えられる。しかも、そのような海女への眼差しは、本稿の「はじめに」でも軽く触れたように、近代メディアの発達を伴って、更なる「意味」を与えられるものとなるのである。

参考文献

伊丹萬里『蜑婦労働問題の研究』巌松堂書店、1917 年。

井上善博「明治の博覧会と水産誌編纂事業」大田区立郷土博物館編『明治時代の水産絵図――明治の博覧会へ出品された水産業の絵図』大田区立郷土博物館、1995 年、108-120 頁。

岩田準一「志摩の蜑女作業の今昔」『島』昭和 9 年前期、1934 年、81-122 頁。
岩田準一『志摩の蜑女』アチックミューゼアム、1939 年。
岩田準一「志摩の漁夫の昔がたり」『旅と伝説』第 13 年 12 月號(156)、1940 年、19-32 頁。
岩田準一「耳と足――私の採集話」『民間伝承』6(6)、1941 年、66-67、70 頁。
大田区立郷土博物館編『明治時代の水産絵図――明治の博覧会へ出品された水産業の絵図』大田区立郷土博物館、1995 年。
岡田照子編『瀬川清子――女性民俗学者の軌跡』岩田書院、2012 年。
小川惟熙「婦人労働者の発育に関する研究（その二）――紡績婦人労働者と海女との比較」『労働科学研究』6(4)、1929 年、34-120 頁。
関西医界時報社「海女を脅かす奇病に一新療法――志摩の医師能登一次氏が研究」『関西医界時報』第 29 年(316)、1936 年、23 頁。
熊本県庁『熊本県水産誌』熊本県、1883 年。
熊本県農商課『熊本県漁業誌 第一編上下』熊本県、1890 年。
倉石あつ子『女性民俗誌論』岩田書院、2009 年。
小暮修三「甦る戦前の〈海女〉――絵葉書に写る〈眼差し〉の社会的変遷」『東京海洋大学研究報告』10、2014 年、6-19 頁。
小暮修三「海女の観光商品化を巡る諸問題――千葉県御宿における〈観光海女〉の事例から」『海洋人間学雑誌』3(特別)、2015 年 a、25-35 頁。
小暮修三「文化映画における海女の〈健康美〉と〈野性味〉――『和具の海女』に映る民族/俗学的眼差し」『映画研究』10、2015 年 b、28-43 頁。
小暮修三「日活ロマンポルノに映る〈海女〉――郷愁を伴った野性のエロティシズム」『映画研究』11、2016 年、40-56 頁。
小暮修三「戦後昭和期（昭和 20 年代～40 年代）の銀幕に映る〈海女〉――古典主義から「エログロ」、そして「ピンク」まで」『東京海洋大学研究報告』14、2018 年、23-37 頁。
小暮修三「海女と SDGs（持続可能な開発目標）――海を守り、地域を守り、食を守る海女の生活文化」『食品と容器』61(6)、2020 年、345-351 頁。
小暮修三「見世物としての海女――博覧会における「海女館」の機能」『東京海洋大学研究報告』18、2022 年、20-37 頁。
桜田勝徳『漁村民俗誌』一誠社、1934 年。
桜田勝徳「漁業」大間知篤三他編『生業と民俗（日本民俗学大系第 5 巻)』平凡社、1959 年、75-119 頁。
瀬川清子「舳倉の海女」『島』昭和 9 年前期、1934 年、53-80 頁。
瀬川清子『海女記』三国書房、1939 年。
瀬川清子「海村婦人の労働」柳田国男編『海村生活の研究』日本民俗學會、1949 年、114-128 頁。
瀬川清子「蜑人の生活」柳田国男編『海村生活の研究』日本民俗學會、1949 年、129-164 頁。
瀬川清子「女性と柳田民俗学」『論争』10 月号、1962 年、152-156 頁。
瀬川清子『海女』未来社、1970 年。
谷川健一編『海女と海士（日本民俗文化資料集成 4)』三一書房、1990 年。
千葉県学務部社会課『潜水労働者に関する調査』千葉県学務部社会課、1931 年。
千葉県農商課『房総水産図誌』千葉県、1883 年。
千葉県農商課『千葉県漁業図解』千葉県、1890 年。
暉峻義等「『海女』の研究」『週刊朝日』9 月 11 日号、1927 年、6-8 頁。
暉峻義等「海女の研究」『日本学術協会報告』4、1928 年。
東海水産科学協会・海の博物館『合冊 三重県水産図解』東海水産科学協会・海の博物館、1984 年。
東海水産科学協会・海の博物館『影印 三重県水産図説』東海水産科学協会・海の博物館、1985 年。
中川正重「海女漁夫及其家族の血壓の小統計的觀察」『保険医学雑誌』43(1)、1944 年、27-32 頁。
中田四朗「目で見る三重県漁業史」『合冊 三重県水産図解』東海水産科学協会・海の博物館、1984 年、320-325 頁。
長崎県編纂『漁業誌』長崎県、1896 年。
名古屋地方職業紹介事務局『三重縣志摩半島「海女」勞働事情』名古屋地方職業紹介事務局、1934 年（谷川健一編『海女と海士（日本民俗文化資料集成 4)』三一書房、1990 年、473-512 頁)。
二野瓶徳夫『日本漁業近代史』平凡社、1999 年。
農商務省農務局編『水産事項特別調査』農商務省、1894 年。
農商務省水産局編『日本水産捕採誌』水産書院、1912 年。
農商務省水産局編『日本水産製品誌』水産書院、1912 年。
福岡県勧業課編『福岡県漁業誌』福岡県、1878 年（西日本文化協会編『福岡県史 近代史料編 農務誌・漁業誌』西日本文化協会、1982 年)。
福岡県第二課『福岡県物産誌』福岡県、1879 年。
藤塚悦司「『日本水産誌』の編纂とその資料」大田区立郷土博物館編『明治時代の水産絵図――明治の博覧会へ出品された水産業の絵図』大田区立郷土博物館、1995 年、121-131 頁。
裴富吉『労働科学の歴史――暉峻義等の学問と思想』 白桃書房、1997 年。
三浦豊彦『暉峻義等――労働科学を創った男』リブロポート、1991 年。
三重県勧業課『三重県水産図解』三重県、1880 年。
三重県勧業課『三重県水産図説』三重県、1880 年。
三重県警察部衛生課編『保健衛生調査 第貳輯』三重県警察部衛生課、1921 年。
三重県警察部衛生課編『蜑婦ニ就テ』三重県警察部衛生課、1921 年。
宮城県勧業課『宮城県漁具図解』宮城県、1888 年。
宮本常一「解説」桜田勝徳『桜田勝徳著作集 1 ――漁村民族誌』名著出版、1980 年、401-421 頁。
安田亀一『「海女の生活」の研究』千葉縣圖書館、1931 年。

安田亀一『海女の生活』社会教育協会、1933 年。
柳田国男「序」瀬川清子『海女記』三国書房、1942 年、1-5 頁。
柳田国男編『海村生活の研究』日本民俗學會、1949 年。
山口麻太郎「壱岐の小崎蜑に就いて」『社会経済史学』3(2)、1933 年、108-202 頁。
山口麻太郎『壱岐島民俗誌』一誠社、1934 年。
山口貞夫「志州の島々」『島』昭和 9 年前期、1934 年、39-52 頁。
山本憲一「海女ノ身體檢査成績」『名古屋医学会雑誌』43(1)、1936 年、167-177 頁。

明治・大正・昭和戦前期の調査研究に現れた海女——なぜ、女性の素潜りアマだけが注目されるようになったのか？

小暮修三*

(* 東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門)

素潜り漁業者の中で、なぜ、海女だけがメディアのみならず学術的な調査研究の対象として注目され続けてきたのか。本稿では、この問いを明らかにするために、明治期の政府・地方行政資料から、大正・昭和戦前期の学術的な調査研究に至るまで、そこに現れた海女の姿を系譜的に追った。先ず、明治期には、近代的な漁業技術の模索を伴って行われた明治政府や地方行政による漁業調査において、素潜りアマに対する男女の区別が特段の差異として認められなかった。しかしながら、大正期に入ると、近代的労働市場に組み込まれた女性労働者の身体的影響に関する対照項として、海女に注目が向けられていった。さらに昭和戦前期には、その眼差しが、労働科学や医学・生理学を通して、潜水労働者かつ婦人労働者たる海女に、そしてその身体に向けられていったのである。それと同時期、海女への関心は、国家主義に包摂される形でも特化され、消えゆく伝統文化への浪漫主義的な憧憬とともに生まれた民俗学という学問分野でも現れてきたのである。

キーワード: 海女、女性労働者、近代的労働市場、労働科学、民俗学